

ゲストハウスの宿の夜は更けてきた。

キッチンに集った宿泊者たちは自前のコンビ二弁当に加えて、Rさんのふるまう料理にすっかり満腹して引き上げていく。若いカップルは毛糸帽を耳までかぶって、底冷えの大晦日の街に出ていった。マフラーをぐるぐる巻いて、銭湯へ行くという年配の女性も。

テーブルの上のワイン三本と缶ビールは空っぽだが、一升瓶と安

ウスキーはまだ残っている。Rさんと私と数人は名残惜し気にグラスを離さない。とはいえ、初対面の旅人同士の交わす話題も途絶えがちだ。すると、テーブルの端で斜に構えていた男性がドミトリーに上がって行き、買ったばかりの酒瓶の包みを抱えて降りてきた。思い切ったように、テーブルの真ん中に押しやる。

「ソレハ タカソウナ オサケデス」。まだ飲み足りない面々のために、俎板でなにやら刻んでいたRさんは、銘酒のラベルに目をやる。クリームチーズにオイルサーディンとケツパ―をのせたクラッカーが皿に追加された。銘酒につられて、私も明日の晩のためにとっておいた小鯛の笹漬けと鯨の昆布巻きを並べる。

残って飲み続けるのは五人ほど。こういう場では、しゃべる者はしゃべるし、黙々と飲むのもありだ。宿の段取りを終えた若いオーナーもワインボトルを持って加わった。通りには小雪が吹き付けてきたようだ。除夜に出かける町の人々の声が響く。

どこから来てどこへ行くのか。今日はどこで何を見たのか。見ず知らずの者同士の会話はシンプルなはずだ。ところが、隣に腰を据えたRさんと私はにわかに話を発展させていった。内線が鳴って、オーナーは毛布の追加を頼まれて立って行った。銘酒を披露した男性も明日は早立ちツーリングで四国に渡るからと、部屋に上がった。

彼が連泊のRさんに近づこうとしていたと、のちにRさん自身から聞いた。その晩は彼のワンチャンスだったのに、無粋にも、私はRさんとの尽きぬ話題に魅了されてしゃべり続けていたのだった。